

プロジェクトワークの実践報告

―「つなぐ」ことを目指した授業―

愛知県立大学非常勤講師 黒野 敦子

愛知県立大学非常勤講師 荻谷 太佳子

1. はじめに

愛知県立大学では、学術交流協定大学の留学生を対象にさまざまな科目が開講されている。本稿では、その中の「プロジェクトワーク」という科目で実践した授業内容とその意義、さらには実践をとおして見えてきた課題について報告をする。

プロジェクトワークとは「ある外国語を学習するときに、クラスまたは学習者のグループでなにかのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用しながら学習していく活動」である(田中・斎藤 1993:140)。外国語学習のなかに「正確さを重視した学習」と「なめらかさを重視した学習」があるとすれば、プロジェクトワークは「典型的になめらかさの学習のための活動」(田中・斎藤 1993:142)であり、「教科書型」(教科書を使う場合)か「非教科書型」(教科書を使わない場合)かという点では「教科書を使わない場合の典型的な例」(細川 2008:4)である。

また、外国語教授法の観点から考えると、プロジェクトワークのような授業実践は、80年代になって注目を浴びるようになった。80年代以降の教授法については、玉木(2009:233)に次のように述べられている。

その後、80年代終わり頃から、教授法が認知的観点から社会的・社会認知的なものへと変化していき、言語を現実的な社会的コンテキストの中で使用することが重要視され始める。いわゆるタスク型授業、プロジェクト型授業、リサーチ型授業、「content-based language learning」への評価が高まり、より現実的な環境の中での言語使用を通して、学習者が様々な言語学習能力や言語使用能力を発揮・発展させることが望まれ始めたのである。

愛知県立大学の「プロジェクトワーク」の授業でも、留学生が「言語を現実的な社会的コンテキストの中で使用することができないか」と考え、2015年度前期には2つのプロジェクトを実施した。プロジェクトのテーマを決める際には、「どんな“題材”について行うのかを事前に(講師が)設定し、その範疇で学

習者が自分独自のテーマを決める」(鈴木 2012:36)というやり方をとった。

なお本稿では、実施した2つのプロジェクトのうち、「小学6年生を対象に自分の母国について紹介する」プロジェクトについて報告をする。

2. 留学生対象日本語科目の概要

愛知県立大学(以下「県大」と略す)では、学術交流協定大学の留学生を対象に、以下の「日本語科目」と「異文化理解科目」を開講している。1コマは、90分の授業である。

表1 日本語科目の概要

科目名	開講時間数	対象レベル
総合日本語Ⅰ	週4コマ	初級レベル
総合日本語Ⅱ	週4コマ	初中級～中級レベル
総合日本語Ⅲ	週3コマ	中級レベル～中上級レベル
日本語文章表現	週1コマ	中級～中上級レベル
語彙・漢字	週1コマ	中級～中上級レベル
日本語実践	週1コマ	初中級～中級レベル

表2 異文化理解科目の概要

科目名	開講時間数	対象レベル
トピックディスカッション	週1コマ	初中級～中上級
フィールド演習	週1コマ	中級～上級
プロジェクトワーク	週2コマ	中級～上級

「プロジェクトワーク」は、異文化理解科目の一つとして位置づけられ、火曜2限(担当講師は荏谷)と金曜2限(担当講師は黒野)に開講されている。

3. 2015年度前期開講の「プロジェクトワーク」

3.1 授業の概要

今学期の「プロジェクトワーク」の授業では、以下の2つの目的を達成するために授業計画を考えた。

まず1つめの目的は、実際の活動を通して、自分が所属しているコミュニティとの関わりを深め、さらには日本社会について理解を深めること、2つめの目的は、そのために必要な日本語の運用能力を向上させることである。これら2つを目的にした理由としては、留学生にとって「県大」は所属しているコミュニティの1つであるが、実際には積極的に関わっていない、あるいは関わりたくても機会がつかめない留学生がいることである。学術交流協定大学の留学生の多くが1年間県大に在籍し、その後帰国する¹。「1年間」という限られた時間を「教室内での日本語学習」にとどまらず、「教室外でコミュニティと関わりながら、日本語の力も伸ばす」ことに使えないかと考え、以上の2つを目的に設定した。

では、具体的なプロジェクトの題材はどうするか。2015年度前期は、(1)県大の日本人学生を授業に招き、ディスカッションをする(ビジターセッション)、(2)長久手市内にある小学校に行き、6年生を対象に母国について紹介する、の2つの活動を行うことを講師から提案した。まず1つめの「ビジターセッション」を提案したのは、前年度に「プロジェクトワーク」を履修していた留学生から「日本人学生とは表面的な話はするが、深い話をする機会がない」という意見を聞いたことがきっかけとなっている。「深い話ができない」理由は、「自分の日本語に自信がない」「日本人が何に興味があるかわからず、何を話題に話したらよいかわからない」「日本人学生はバイトなどで忙しそう」など様々である。先にも述べたが、日本の大学に留学しているにもかかわらず、日本人学生と深く交流する機会がなく、日本人についてよくわからないまま帰国するのは残念だと考え、「プロジェクトワーク」の授業でその契機を提供したいと考えた。

一方、2つめの題材「小学生に母国を紹介する」は、「ビジターセッション」と対比させる形で内容を考えた。「ビジターセッション」が「日本人を知る」ことを活動の中心に置いたのに対し、「母国の紹介」活動は「自分を伝える」ことを中心に考えた。また、「ビジターセッション」では、大学内のコミュニティとつながる契機を提供しようと考えたが、「母国の紹介」活動は大学外のコミュニティとつながる契機を提供したいと考え、活動の場を大学の外(今回は小学校)に決めた。

以上のような経緯から、2015年度前期の「プロジェクトワーク」は、「日本人学生と留学生をつなぐビジターセッション」と「日本社会と留学生をつなぐ小学校訪問」を実施した。

¹ 数は多くないが、半年で帰国する留学生もいる。

3.2 「プロジェクトワーク」の履修者

2015 年度前期は、8名の留学生在授業に参加した。以下、留学生の性別、国籍、日本語のレベル、来日年月日を表に記す。

表3 履修者の概要

	性別	国籍	日本語のレベル	来日年月日
留学生 A	男	韓国	上級	2014 年 10 月 1 日
留学生 B	男	韓国	中級～中上級	2015 年 4 月 1 日
留学生 C	女	韓国	上級	2014 年 10 月 1 日
留学生 D	女	韓国	上級	2015 年 4 月 1 日
留学生 E	女	中国	上級	2015 年 4 月 1 日
留学生 F	女	中国	上級	2015 年 4 月 1 日
留学生 G	女	台湾	上級	2015 年 4 月 1 日
留学生 H	男	台湾	中級～中上級	2015 年 4 月 1 日

日本語のレベルは、授業が始まる前の 2015 年4月に実施したプレイスメントテストの結果に基づいている。プレイスメントテストは、文法(90 点満点)と読解(10 点満点)から成る。文法と読解の合計得点が 70 点未満だった留學生については、「中級～中上級」と判断した。「上級」と判断した留學生の合計得点は、一番低かった学生で 77.8 点、一番高かった学生で 88.5 点であった。

3.3 授業スケジュールと授業の内容

1つめのプロジェクト「ビジターセッション」を終えたあと、さっそく小学校での活動にむけて準備にとりかかった。以下、授業スケジュールを示す。

表4 授業スケジュール

	日にち	授業内容
1	6月5日(金)	発表内容の検討:母国の何を紹介するか

2	6月9日(火)	発表内容の検討:母国の何を紹介するか
3	6月12日(金)	発表内容の検討:母国の何を紹介するか、発表媒体の検討
4	6月16日(火)	発表の構成の検討、発表媒体づくり開始
5	6月23日(火)	発表媒体づくり
6	6月26日(金)	発表媒体づくり
7	6月30日(火)	発表媒体づくり
8	7月3日(金)	発表原稿の作成
9	7月7日(火)	リハーサル
10	7月10日(金)	最終リハーサル
11	7月14日(火)	小学校にて発表(本番)、ふりかえり(宿題)
12	7月21日(火)	活動のふりかえり、小学校の先生方にお礼の手紙を書く

母国を紹介するための発表は、二人一組のペアで行うことにした。履修者の国籍の内訳が韓国4名、中国2名、台湾2名であったため、韓国2ペア²、中国1ペア、台湾1ペアで準備を進めた。

(1)母国の何を紹介するか

テーマ決めで留学生は、母国の何について発表するかを考えた。そのために、聞き手である小学生が知りたいと思っていることを知らせる必要があると考え、事前に小学校に問い合わせたところ、次の3点について小学生が知りたいと考えていることがわかった。

- 1) その国の小学校の様子について(登下校、授業、給食、清掃、よくやる遊び)
- 2) 衣食住について
- 3) 行事について

留学生は、この回答を参考に、紹介する具体的内容を話し合い、ワークシートに書きとめた。

² 男子学生と男子学生で一組、女子学生と女子学生で一組という形になった。以下、この2つのペアを区別する際には「韓国男子ペア」、「韓国女子ペア」と呼ぶ。

(2)構成の検討

発表の構成を考える前に、小学校で母国を紹介する目的を考える時間をとった。目的を明確にすることで、グループ内で同じ方向を向いて活動を進めてもらいたいと考えたためである。発表媒体は、自分たちが伝えたいことを伝えるために最適なものが何かを話し合い、韓国ペアはどちらもポスターを、中国ペアと台湾ペアはパワーポイント(以下「PPT」と略す)を選んだ。

また、発表媒体作りに入る前に、グループで考えた構成をグループ間で共有し質疑応答する時間をとった。他グループに伝えることで、グループ内で話し合った内容をお互いに確認し明確にすること、他グループの発表アイデアを知ること、他グループからのコメントをもらうことが可能になると考えたためである。

質疑応答では、紹介する内容が多い台湾ペアに対し「発表時間が足りなくなるのではないか」、具体的内容の少ない韓国ペアに対し「時間が余るのではないか」等の指摘がされた。

(3)発表媒体作り

発表媒体作りは、各ペアに分かれて行った。

通常の発表では、聞き手は同じ大学生か教師であることが多い。しかし、今回、聞き手が小学生であったことが、学生により強く聞き手を意識させ、皆、「どうやったら楽しく聞いてもらえるか」を考え、作業を進めていた。以下はそのアイデアである。

- ・台湾ペア :画像を使う／冗談を交えながら、わかりやすい言葉を使う。
- ・中国ペア :動画を使う／一緒にやってもらう。
- ・韓国女子ペア :話しかける／参加型
- ・韓国男子ペア :小学生に扮して紹介

(4)中間報告

中間報告の目的は、他グループの発表内容を知ること、他グループからコメントをもらうこと、そして、他グループの進捗状況を知ることである。学生は、お互いの良い点を認め合ったり、改善点を伝え合ったりした。中国ペアは「中国らしさが出ている」とコメントされ、初めてそれに気づいたようだ。発表媒体ができあがったグループから、発表当日のシミュレーションを考える作業に入った。小学校の教室入室から始まり発表、発表後の質疑応答までに「何を言うか」、また、必要な備品・消耗品等は何かを考え、ワークシートに書いた。

(5)リハーサル

リハーサルは、発表時間、「一番伝えたいことは何か」「発表で気を付けること」を確認した上で、ペアごとで行った。リハーサル後、発表を自己評価し、お互いにコメントを伝え合った。例えば、発表時間が大幅にオーバーしてしまった中国ペアは、「時間が課題」との指摘を受け、「一番伝えたいことは何か」を再考することとなった。また、韓国女子ペアは、質疑応答の仕方が課題であることに自ら気づき、もう一度やり方を考えるとコメントした。

4. 小学校での発表

4.1 発表の概要

発表当日は、以下のようなタイムスケジュールで活動が進められた。

表5 当日の流れ

10:00	小学校の最寄りの駅に集合
10:35	校長室にて挨拶
10:50	発表 1回目
11:15	発表 2回目
11:40	授業参観
12:25	給食
13:10	掃除
13:25	昼休み
13:40	校長室前にて挨拶、解散

いずれのペアも6年生の2つのクラスで発表を行った³。1回目と2回目の発表内容は同じである。発表

³韓国男子ペアと中国ペアは6年1組と2組の教室において、韓国女子ペアと台湾ペアは6年3組と4組の教室において発表した。1回目の発表が終わったら、もう1つのクラスに移動して、2回目の発表を行った。

時間は、質疑応答を含め 20 分とした。発表後は、各学年の授業を見学し、昼休みには6年生と一緒に給食を食べ、その後の掃除や昼休みも時間を共にした。

4.2 発表の内容

各ペアの発表テーマと発表の目的について、表6に示す。

表6 発表テーマと目的

発表テーマ	発表者	発表の目的
韓国の小学生の一日 —登校、給食、授業後—	韓国男子ペア	韓国の小学生の生活を紹介し、日本との違いを伝え、韓国に関心をもってもらうこと。
韓国のお正月と韓服 —間違っている韓国語—	韓国女子ペア	韓国の正月について説明し、小学生に日本とは違う国があることを知ってもらい、視野を広げてもらうこと。 間違っていることをただすこと。
中国人小学生のよくやる遊び	中国ペア	遊びは違っても、楽しいと思う感情は同じであることを伝えること。
台湾と台湾の小学校について	台湾ペア	日本の小学校との違いを比べ、授業では習わないことを学ぶ機会を提供すること。

4.2.1 韓国男子ペアの発表

韓国男子ペアは、「デソンくん」という架空の人物を設定し、「デソンくんの1日」というタイトルで、韓国の小学生の1日を紹介した。登校時、学校の授業、給食、下校後に行く塾、塾の帰り道など、時間軸にそって、小学生の日常を紹介した。発表スタイルも他の3ペアとは異なり、一人の留学生がナレーションを、もう一人の留学生が「デソンくん」を演じる形で、ポスターの内容に沿って進めていった。

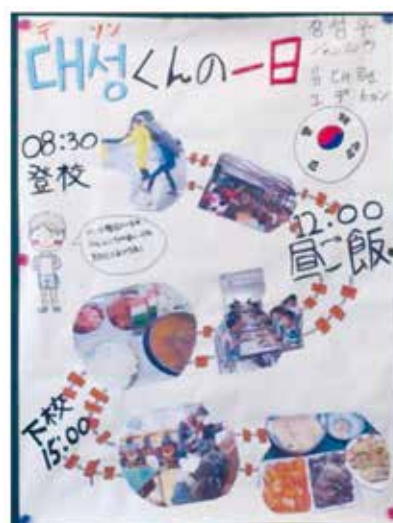


図1 発表ポスター(韓国男子ペア)

4.2.2 韓国女子ペアの発表

韓国女子ペアは、「韓国のお正月／韓国の食べ物」「韓服／韓服の着方」で4枚のポスターを準備、二人で担当を決め発表した。「韓国のお正月」では、お正月の遊びをクイズ形式で紹介した。クイズの答えは扉の中に書き、扉を開ける時は掛け声を言うよう促す等、小学生が発表に参加できるよう工夫した。「韓服」のポスターでは、韓国の民族衣装の呼称は「チマチョゴリ」ではなく「ハンボク」であることを伝え、それについて詳しく説明、最後は持参した韓服を着てみせた。

発表後の質疑応答では、小学生から韓服(いつ着るか、値段、靴等)、遊び(日本と似た遊びがあるのはなぜか、その他の韓国の遊び)等に関する質問があり、それに答えていた。



図2 発表ポスター(韓国女子ペア)⁴

4.2.3 中国ペアの発表

中国ペアは、中国の小学校の朝礼の様子や小学生の服装、学校の給食などについて紹介したあとで、中国の小学生がよくやる遊びのなかでも「ゴムなわ跳び」に焦点をあてて、発表をした。ゴムなわ跳びで使うゴムなわや、子供たちが遊んでいる様子をPPTで示した。発表を終えたあとで、実際に6年生の子供たちにゴムなわ跳びを体験してもらった。まず、留学生がどうやって遊ぶか見本を見せ、挑戦してみたい小学生に前に出てきてやってもらった。

⁴韓国女子ペアは、実際には4枚のポスターを作成したが、写真はそのうちの2枚である。



図3 発表PPT(中国ペア)

4.2.4 台湾ペアの発表

台湾ペアは、「台湾概要」「学校生活」について、PPTを使って発表した。「台湾概要」では、有名な場所、祝日、食べ物について紹介した。留学生の声小さく明瞭さに欠け、聞き取りにくいところがあったが、PPTがそれを補っていたため、小学生たちは留学生の発表内容を理解できている様子だった。「学校生活」では、登下校、制服、昼寝等について、一般論とともに自分の経験談を織り交ぜ、自分に引き寄せた内容で紹介した。小学生からクスクスと笑い声もれていたことから、小学生が留学生を身近で親しみやすい存在と感じていることがうかがえた。



図4 発表PPT(台湾ペア)

質疑応答では、昼寝や制服についての質問があり、それに答えていた。

5. 活動のふりかえり

5.1 「ふりかえりシート」によるふりかえり

小学校での発表を終えたあと、留学生には今回の活動をふりかえってもらった。ふりかえりの手順は、

- (1)「ふりかえりシート」を記入する。
- (2)クラスで共有、受入校の学級担任に手紙で「学び」を伝える。
- (3)友達の「ふりかえり」で気づいたことを書く。

である。以下、その内容を簡単に紹介する。

(1)「ふりかえりシート」記入

発表当日、小学校で解散する前に「ふりかえりシート」を課題として配布した。「ふりかえりシート」の質問は以下の6つである。

Q1:母国紹介について(いつ、どこで、何を紹介したか)。

Q2:日本の小学生に、皆さんの国を紹介した目的は何か。目的は達成できたか、どうしてそう思うか。

Q3:特に伝えたいことは何か。それを伝えることができたか。

Q4:小学生は、どんなことに興味を持っていたか。

Q5:「私たちの発表のここがすばらしかった」と思うこと。

Q6:「うまくいかなかった」と思ったこと。どうすればよかったと思うか。

(2)「ふりかえり」の共有とお礼の手紙

小学校訪問後の最初の授業内容は、1)各自のふりかえり内容を共有すること、2)受入校の学級担任にお礼の手紙を書くことだった。手紙には、ふりかえりで得た学びを添えるよう伝えた。ふりかえった内容を「伝える」という形に落とし込みたかったからだが、ふりかえりの共有に時間を要し、じっくり考えて手紙を書く時間が十分にとれず、講師が準備したテンプレートをベースに表面的な内容を書くにとどまった。

ふりかえりの共有は、事前に学生が提出した「ふりかえりシート」をもとに行った。クラスで共有する前に、まず、発表ペアでふりかえり内容を共有する時間をとった。すぐ話し合うのではなく、お互いの「ふりかえりシート」をじっくり黙読してから、当日の様子を話し合うペアが多かった。その後、クラス全体に「母国紹介の目的とそれが達成できたか」「うまくいかなかったこと」を伝えた。

(3)「ふりかえり」からの気づき

授業で各自のふりかえりを共有する時間をとったが、学生の反応から、その内容が十分に共有できていないと感じた。そこで、授業最後に、今日話し合ったことをもとに「ふりかえりからの気づき」を課題として提出するよう伝えた。

5.2 フォローアップインタビュー

前節で述べたように、小学校での発表が終わったあとに、留学生たちは授業で今回のプロジェクトについて話しあい、課題も提出した。しかしながら、限られた時間のなかで出てきたコメントや文章からだ

けではよくわからないことも多かったため、ペアごとにインタビューを実施することにした。

インタビューは、「プロジェクトワーク」の授業がすべて終了したあとで、留学生と個別に約束をし、行った。インタビュアーは、筆者ら二人である。以下、表7にインタビュー時間とインタビューを実施した場所を記す。

表7 インタビュー実施概要

	日時	時間	場所
韓国男子ペア	2015年8月3日	約57分	愛知県立大学内の教室
韓国女子ペア	2015年8月5日	約53分	国際留学生会館 ⁵
中国ペア	2015年8月5日	約45分	国際留学生会館
台湾ペア	2015年8月5日	約58分	国際留学生会館

インタビューの際には、留学生が書いた「ふりかえりシート」と「ふりかえりからの気づき」をインタビュアーと留学生の手元に置き、進めた。どのペアにも、発表の準備の過程と発表本番のそれぞれについて、以下の4つの質問をした。

- (1) どんなことを学んだと思うか。
- (2) 楽しかったことは何か。
- (3) 課題や反省点があるとすれば何か。
- (4) 今回の発表の場が小学校だったことについてどう思うか。

これらの4つの質問を軸にインタビューを進めたが、話題が質問内容から違う方向に発展していても会話はとめず、留学生には自由に話してもらった。

6. 考察

6.1 「ふりかえりシート」

本プロジェクトの目的は「大学外のコミュニティと学生をつなぐ」である。人と人は、お互いの伝えたいことを伝えあうことでつながり、関係を深めていくと考える。よって、留学生が発表を通して「自分の伝えたいことを小学生に伝えることができた」と感じたかに着目、「ふりかえりシート」の「私たちの発表のここ

⁵「プロジェクトワーク」の履修者全員が国際留学生会館に住んでいる。

がすばらしかったと思うこと」及び、「発表の目的は達成できたか／どうしてそう思うか」を考察する。

四角の中は留学生が「ふりかえりシート」に書いたコメントである。日本語表記に誤りがある場合、斜体にし、そのまま引用した。

6.1.1 韓国男子ペア

韓国男子ペアは、準備時、小学生は大人より集中力がないと気にしていた。そして、「小学生が楽しく聞けるように」「親しみを感じてもらえるように」等、子どもたちに受け入れられるような発表を工夫していた。

(1)「私たちの発表のここがすばらしかった」と思うこと

A: ロールプレイ形式であるユニークさ

B: A さんが実際にデソン君になってデソン君の一日を紹介して、日本の小学生達が興味をもってくれました。

「デソン君になってデソン君の一日を紹介した」ことで「日本の小学生たちが興味をもってくれました」とある。自分たちが工夫した伝え方が目的達成のために有効だったと感じているといえる。

(2)発表の目的は達成できたか／どうしてそう思うか

A: すごく反応が良く、いろんな質問を受けた。達成できたと思う。

B: できたと思います。みんな喜んでくれたし、韓国の小学生の紹介を聞いて驚いた顔をしたりするのを見てそう思いました。

小学生の反応が良かった理由を「日本と韓国の違いを知ることができたから」ではなく、「発表の仕方がおもしろかったから」と考えることもできよう。しかし、B の「韓国の小学生の紹介を聞いて驚いた顔をした」から、日本の小学生たちは日本と韓国の違いを楽しんで聞いていたことがうかがえる。彼らは自分たちの伝えたいことを伝えることができたといえよう。

6.1.2 韓国女子ペア

韓国女子ペアはお互いに異なる目的意識を持ち、それぞれのテーマでポスターを作った。A は「韓国(外国)の正月について知ることで違いを感じ、視野を広げてもらうこと」を目的に「韓国の正月」について、Bは「韓国について誤って伝わっている情報を正しく知ってもらうこと」を目的に「韓服」について紹介するポスターを作った。それぞれが各自のテーマでポスター作りを進めていたが、「ペアの準備した写真を見ながら、自分の子供の頃の話の披露できたことが楽しかった(インタビュー談)」とあるように、作業を通じて、お互いに良好な関係を築いていたようだ。

(1)「私たちの発表のここがすばらしかった」と思うこと

A: 緊張せず、いい笑顔と大声ではっきり伝えました

B: チームメートの A さんが学生たちの参加を求めたり、リアクションを求めながら発表して、子供たちもんだん笑顔で発表を聞いてくれました。実際にハンボクを持ってきて、着方を見せたのも良かったと思います。男のハンボクは準備が出来なかったので手作り人形を持って行ったのも良かったと思います。

発表は A、次に B の順に行った。A は、小学生に語りかけるように話し、ポスターの中の扉を開く時、一緒に掛け声を言うよう促す等、双方向のやりとりを工夫していた。その結果、初めは堅い表情だった小学生に笑顔が現れ、話しやすい雰囲気での発表できたことが、B のコメントからうかがえる。

(2)発表の目的は達成できたか/どうしてそう思うか

A: 達成できました。皆とても楽しそうな顔をして、質問もたくさんあったからです。

B: 大体出来たと思います。学生たちからのリアクションも悪くなかったので。

発表後、韓服や遊びに関する質問があがった。質問の一つに「似た遊びがあるのはなぜか」があった。前述したが、今回の発表は6年生の「総合」の時間を使っている。そのテーマは「国際理解」で、小学生はこの発表までに「日本の文化はいろいろな国の影響を受けて成り立っている」ことを学んでいる。初め、この質問の意図がどこにあるかわからず、模倣したと感じてのことかと勘ぐり、学生が答えに窮しないかと心配だったが、学生は「同じアジアの国。一緒の文化もあるんだね」と笑顔で答えていた。日本の小学生と韓国の留学生の簡単な短い質疑応答だったが、韓国と日本の国同士の理解につながる契機になるように感じた。

6.1.3 中国ペア

中国ペアは、発表の目的を「違いを伝える」にとどめず、「やる遊びは違っても、遊んで楽しいと思う感情は同じであることを伝えること」においた。初め、このペアの発表内容は「中国の遊び(お手玉、羽根けり、ゴム縄とび)」と「目の体操」だった。特に、「目の体操」は中国ならではのことだと発表したくて仕方がない様子だった。しかし、発表時間を超えることから、自分たちが伝えたいことを伝えるためには何を伝えたらいいのかを考え直し、「目の体操」を割愛、遊びに絞って発表した。

(1)「私たちの発表のここがすばらしかった」と思うこと

A: 教室でゴム縄跳び(オンドリ)を説明しながら実際にやってみせたり、小学生を誘って一緒にやったりしたことです。小学生たち/はこの遊びのやり方と楽しさをちゃんとわかってくれたのは、実際に一緒にやったからだと思います。

B: 自分たちの発表が2組の子供たちに興味を持たせてしまったらしいことが素晴らしかったと思います。

小学生が遊びの楽しさを感じることができるよう、「実際に体験してもらう」という参加型の発表を行ったことで、「小学生たちは遊びの楽しさをわかってくれた」「子供たちに興味を持たせてしまったらしい」とある。発表の目的である「楽しいと思う感情は同じであることを伝える」について、十分な達成感を感じていることがうかがえる。

(2)発表の目的は達成できたか/どうしてそう思うか

A: 達成できたと思います。私たちの中国の小学生の全体的な生活についての紹介をみて、中国の小学生生活はほしいわかってきて、ゴム縄遊びにも楽しんでいたと思うから。

B: 70%達成できたと思います。

最初の2組だったら、たぶん90%以上できたともいえます。なぜなら、皆は性格が明るいし、普段も遊びが好きそうですが、もう時間だったのに、まだ遊びたがっていました。その遊びがくれた楽しさはもう受け取れたかなと思うからです。でも、その次の2組はみなさんが静かだし、反応がなかなかなかったので、自分たちが何をやり間違ったのかと思って、自身があまりないからです。

「ゴム縄遊びにも楽しんでいたと思うから」「もう時間だったのに、まだ遊びたがっていました」等、二人とも発表に対する小学生の反応から「発表の目的は達成できた」と書いている。

6.1.4 台湾ペア

台湾ペアの目的は「日本の小学校との違いを比べ、授業では習わないことを学ぶ機会を提供すること」だった。

(1)「私たちの発表のここがすばらしかった」と思うこと

A: 自分の国の小学生についてのこと。ここが素晴らしいと思う、皆が楽しそう。

B: 発表が終わったとき、ある小学生が「面白かった」と伝えてくれました。そして、ロシアからの留学生さんも「面白かったです。元々は台湾のことがぜんぜんわかりませんでした。」と伝えてくれました。

発表当日、A は緊張で早口になり、PPT のスライドを追うだけの発表になった。一方、その後発表したBは、緊張していたものの、話しかけるような口調で、自身の体験を冗談まじりに話す等し、和やかな雰囲気を作っていた。

台湾ペアは、小学生への事前聞き取りで得た小学生の知りたいことからテーマを選び、二人で分担、お互いあまり話しあうこともなく、各自淡々と PPT シートを作っていた。そのため、A の、Bの発表を評価するコメントは、Bにとって意外だったことが、Bの驚いた表情からうかがえた。そして、その後、お互いのはにかんだような表情から、二人の関係がより良好なものになったように思われた。

(2)発表の目的は達成できたか／どうしてそう思うか

A: 達成しました。皆喜んでいる。

B: 達成できたと思います。二つの国の小学校生活は似ていますが、今回の発表を通して、両方の違いを区別しました。

A の「達成しました。皆喜んでいる」とのコメントから、B の発表が小学生を喜ばせたことを認め、自分だけでは得られなかった成果に満足していることがうかがえる。

また、当日発表を聞いていたシベリア連邦大学の留学生がBに「おもしろかったです。もともとは台湾のことがぜんぜんわかりませんでした」と伝えたことも、達成感を高める一因になったようである。

6.1.5 「ふりかえり」共有後の気づき

「ふりかえりシート」で各自がふりかえった内容を共有し、友達のふりかえりを読んで気づいたことをさらにふりかえった。以下に、友達のふりかえりから自身のふりかえりを深めたと考えられるコメントを記す。

(1) 韓国男子 B

子どもに‘韓国の個性はどんな遊びをする?’って聞かれて中国ペアがすごくいい発表をしたなと思いました。自分たちは満足していないことを見て素晴らしいと思いました。

韓国男子ペアの前に発表した中国ペアは、体験を交えながら「遊び」を紹介した。そのため、小学生から「遊び」に関する質問があったが、韓国男子ペアは準備がなく答えられなかった。Bにとって完璧な発表をした中国ペアが、自らを厳しくふりかえっている様子に触れ、自身のふりかえりを深めようとする姿勢がうかがえた。

(2) 韓国女子 A

友達の振り返りを見たらやっぱり自分の目標をちゃんと知ってて、達成したと言う意見が多かったです。私は私が何を達成したかだけ気にしてたのに、パートナーと一緒に小学生の笑顔を引き出したという意見があって自分が少し小さくなる気分を感じ、反省しました。

彼女は「ふりかえりシート」の「私たちの発表のここがすばらしかった」に、自分の発表ですばらしかったことを書いた。友達のふりかえりから、協働で成し遂げることの意義に意識が向いたようだ。

(3) 台湾男子 B

皆のふりかえりはとてもいい。たくさんことを勉強しました。気づいたことは皆がこの発表を楽しんでいる。私は緊張したので自分をしゃべった事をあまり覚えていない。(中略)私は発表することについて多分難しい、少し面白くないと思う。私は反省した、今回の問題に勉強して直す。

皆のふりかえりから、皆が発表を楽しんでいたことを知り、緊張して話したことすら覚えていない自分と皆を比べ、自分ももっと頑張ろうと思ったようだ。

6.2 フォローアップインタビュー

本節では、留学生に実施したフォローアップインタビューから明らかになったことを述べる。5.2 で述べたように、インタビューは、(1)どんなことを学んだと思うか、(2)楽しかったことは何か、(3)課題や反省点があるとすれば何か、(4)今回の発表の場が小学校だったことについてどう思うか、の4点を軸に進

めたため、以下それぞれの項目について留学生の回答を記す。

6.2.1 「プロジェクトワーク」とおして留学生が学んだこと

発表準備の過程で「学んだこと」として、以下のような発話が観察された。

- ・ 準備の時、「親しみをこめた話し方」「没頭して聞いてもらえるようにメリハリをつける」等、子どもたちに親しまれる話し方を考えた。
- ・ 「説明しなければ」と思ったから、そのための日本語の勉強をしたし、そのための知識も深められるよう努めた。
- ・ 言葉づかみに気をつけた。仲間意識をもってもらえるような言葉は何かと考えた(「ね/よ」を使う等)。

これらの発話から、発表の聞き手が小学生であることを留学生が非常に意識して「話し方」を工夫していることがわかる。また、そういった意識は、発表媒体の制作や発表の際の姿勢にまで影響を与えていることがわかった。以下、それがうかがえる発話を示す。

- ・ 発表媒体を何にするか、相手にとって何が適切かを考えることが勉強になった。PPTをわかりやすく作るにはどうしたらよいか考えた。
- ・ 「どうやったら子どもたちが楽しんでくれるか」を意識して準備し、足のポーズまで工夫した。

また、準備の過程では、「他のペアのポスターが、自分たちのポスター制作に影響を与えた」「中国の学生が作ったPPT、台湾の学生が作ったPPTを見るということも新鮮だった」「(授業で行ったリハーサルで)他の人の発表を見たのが学びになった。発表のやり方もおもしろかったし、他の国のことも知ることができた」など、クラスメートから多くのことを学んだことも明らかになった。さらに、発表の準備をしながら、母国文化(例えば、民族衣装や食べ物など)を新たな目で見ることができたり、自分の小学生時代を思い出すなど、自国の文化をふりかえるきっかけにもなったようである。

一方、発表の経験をおして学んだこととして、以下のような発話が観察された。

- ・ 普段は学生なので「教えてもらう」ことが多いが、今回の活動によって「人に何かを教える」という体験ができた。

- ・ いつも「聞き手」だったけど、「話し手」になった。「聞き手」としてのリアクションの大切さに気づいた。
- ・ 1回目の発表で台本どおりやったら反応がうすかったので、2回目の発表ではアドリブをきかせた。

留学生たちは発表相手が小学生だったこともあり、普段とは異なる立場を学ぶ機会を得たようである。

6.2.2 留学生が楽しかったと感じたこと

次に、今回のプロジェクトをやってみて留学生が楽しかったと感じたことについて報告する。まず、準備の過程で楽しかったこととして、以下のような発話があった。

- ・ クラスメートと一緒に何かを完成させるのが楽しかった。黙って緊張しながらだとやる気が出ないが、他の人と話しながら作業が進められたのがよかった。
- ・ ポスターを制作する過程で、準備した写真を見ながら、自分の子供の頃の話が披露できたことが楽しかった。自分の昔を思い出すことが楽しかった。
- ・ 普通の日本人は知っているようなことでも、小学生は知らないだろうから、それを教えることを想像するのがおもしろかった。
- ・ 他のグループのポスターを見るのが楽しかった。国によって違うことを聞いたり、他国で活躍している母国の芸能人を知ったり、他の人の発表の仕方を見るのが楽しかった。

また、発表本番に関しては、「二人で連携して発表できたのが楽しかった。小学生からの質問に答えられない時にパートナーが答えてくれたことがうれしかった」や「子どもたちがきらきらの目で聞いてくれた」「質問をたくさんしてくれる子がいた。いい質問をしてくれる子がいた」など、パートナーと協力してできた喜びや小学生が積極的に自分の発表を聞いてくれたことに対する満足感があつたようである。

6.2.3 留学生が感じた課題

今回のプロジェクトでは、学んだことや楽しかったことも多かった一方で、留学生たちはさまざまな課題も見つけた。インタビューでは、発表内容、小学生とのやりとり、自分の日本語について言及があつた。以下、留学生の発話を紹介する。

<発表内容について>

- ・ 発表自体は完璧だったと思うが、テーマに「遊び」を加えればもっと完璧になったと思う。自分たちの発表内容について、日本人の友達に話したら、「日本と同じ」と言われた。小学生は楽しんで聞いてくれたが、「違うんだ」という驚きを与えることができなかった。
- ・ 思ったより韓国の遊びを知っていて、深い質問をされた。準備不足を感じた。相手が何を知っているか、何に関心があるかを考えて準備することの難しさを感じた。
- ・ 相手が子どもだったので、韓服の子ども用について、もう少し説明してもよかったと思う。
- ・ 食べ物について、食べたことがなくて初めて見るものなので、もう少し説明を加えてもよかったかなと思う。

<小学生とのやりとりについて>

- ・ 発表内容に対する小学生の反応を予測して、準備をすればよかった。発表内容に関係のないものが質問された。
- ・ 思ったとおりの反応はこないと感じたが、一方で時間をかければかけただけの反応が返ってくると思った。
- ・ リアクションがない時どうしたらよいかを考えておくべきだった。「こんなことがおきるかも」を考えて準備すべきだった。
- ・ 「質問」について考えておけばよかった。質問がでなかった場合への対応を考えておけばよかった。例えば雑談タイムにするとか。
- ・ 緊張したまま、発表が終わってしまった。質問に対して答えられないこともあった。

<日本語について>

- ・ 台本を作らなかったが、日本語が出なかった場面があった。台本を用意していれば、「言い換えて言う」ではなく、「準備したわかりやすい日本語」を使うことができたのではないかなと思う。韓国の言葉を直訳したような日本語を使ってしまった。
- ・ おもしろいことを考えていったのに、おもしろく伝えられなかった。日本語のなめらかさにも課題を感じた。

<その他>

- ・ 小学生の反応が良すぎて、説明を補足したり、やりとりを増やしたりしてしまい、時間を使いすぎた。時間管理に課題を感じた。
- ・ リラックスした雰囲気を作るなど、聞き手に配慮できるとよかった。

以上の発話から、発表する内容についても発表する際の日本語についても、準備の大切さと難しさを留学生が感じたことがわかる。また、小学生の反応が予想とは違った場合や質問があまり出なかった場合などを想定することの大切さも学んだことがうかがえる。また、発表の時間管理や聞き手への配慮についても言及するなど、「発表」という場で考慮しなければならないことについても気づきがあった。

6.2.4 小学生を相手に発表したこと

筆者らが今回のプロジェクトを計画する際、「だれに対して、留学生の母国を紹介するのか」という点は、検討しなければならないことだった。同じ立場の大学生、地域の日本人住民などさまざまな可能性をさぐっていくなかで、結果的に小学6年生の「総合」授業の一部に関わることになった。そこで、大学生ではなく、地域の日本人住民でもない、日本の小学生と関わりをもったことについて留学生がどう考えたかをきいた。以下、その回答を記す。

- ・ ビジターセッションだったら、相手は大学生でもいいが、発表の場合、相手が大学生だと、聞き手は評価の目で自分たちを見るのではとってしまう。地域でボランティア活動をしているような日本人なら、目上の人だが、だからこそあたたかい目で見えてくれると思う。
- ・ 同年代のほうが苦手だから、小学生のほうがやりやすいからよかったと思った。実際にやりやすかった。
- ・ 大学生・社会人への発表のほうが、小学生(年下)より、ストレスや緊張が高い。小学生なら敬語を使わなくてもいい。
- ・ 小学生は機会がないと会えない。リアクションが素直。情報に対してありがたみを感じてくれる(ネット等で調べることができないから)。

以上のように、大学生より小学生のほうが発表しやすいという意見が予想していたよりも多くあった。また、「大人相手だったら、『外国の留学生だから』と甘い目で見えてくれるし、間違えても歩み寄って聞いてもらえるから、甘えてしまったかもしれない。しかし、相手が小学生だったから、きちんとした日本語を使わなければと思った」のように、小学生だからこそいい緊張感を持った留学生もいたようである。

しかしながら、「発表をすることで、自分も相手も勉強になるから、相手の年代は関係ない」「小学生とは友達になれないけど、大学生だったら、友達になれると思う」などの意見もあり、とらえ方は留学生によって異なることもわかった。

さらに、小学校で発表したことについて、以下のような感想が観察された。

- ・ どの国の子も一緒だなと感じた。
- ・ どの国も小学校の先生と生徒の関係は同じだと思った。
- ・ 発表をすることで、小学校の様子を知ることができたのでよかった(授業の様子、給食、生活を知ることができたから)。また、発表後に小学校内を見学させてもらえて、生活の様子や授業の内容、水泳の授業などについて知ることができてよかった。
- ・ 給食を生徒と先生と一緒に食べる場所がよいと思った。

以上のことから、小学校に行って母国紹介を行ったことは、留学生にとって貴重な体験になったことがうかがえる。

7. 小学校へのインタビュー

先に述べたように、今回の活動は、小学6年生の「総合」授業の一部に関わることによって実現した。訪問した小学校では、「国際理解」をテーマに、2学期から本格的に「総合」の授業を展開していくとのことだった。県大の留学生の発表は、その「国際理解」の「導入」になることが期待されていた。そこで、小学校の6年生の学級担任に、今回の活動についてどのように感じたのか意見と感想を聞いた。

<インタビューの概要>

- (1)日時 :2015年8月21日 午前9時～9時50分
- (2)場所 :小学校の校長室
- (3)インタビュアー :黒野敦子・荻谷太佳子
- (4)インタビュー対象者 :6年生の学級担任4名

学級担任からは、「異文化を持つ人との交流は貴重な体験だった」「外国と日本の違いがわかってよかった」「子供たちがおもしろがっていたことが表情からうかがえた」「韓国の発表の後は、民族衣装に関心をもっていた」「遊びで子どもたちをひきつけていた」「日本語が上手」など、好意的な意見があった一方で、発表の内容や形式については以下のような指摘があった。

<発表の内容について>

- ・ 2学期の「国際理解」の導入にならないかなと思って、留学生が母国について紹介するという話を受けたが、導入にはならなかった。
- ・ 大学のレポートみたいな発表だと思った。留学生の目標は達成できたかもしれないが、小学校側の目標に照らし合わせてみた場合、どうだろうと思った。
- ・ 外国について、子供たちがもっと知りたい、もっと質問がしたくなる、もっと調べていきたい、という気持ちを盛り上げてもらえたらと思っていたが、その目的が達成されたかどうかは疑問が残る。
- ・ 1学期の「社会」で、韓国・中国から伝来された文化や物資について勉強し、韓国や中国が日本のルーツだということに触れていた。「韓国や中国に教えてもらって、今の日本がある」ということに触れてきているので、その辺のことをもう少し触れてほしかった。中国・韓国と日本の関係に踏み込んでいけるような質問が出る発表を期待した。

<発表の形式について>

- ・ 「子供が参加できるようなもの」を入れてもらえたらよかったと思う。子供が動いて喋ることによって、子供の気持ちを動かすことができたのではないかな。大学生が一方向的に話すタイプの発表では、子供たちはなかなか積極的に参加できない。

以上が小学校側の今回の活動に対するコメントである。このような指摘がなされた理由として、1)小学校の「総合」授業の具体的な内容を、担当教員である筆者らが十分に把握していなかったこと、2)その結果、留学生による母国の紹介活動を「総合」の授業のなかに適切に位置づけられず、「国際理解」の導入にならなかったこと、が考えられる。小学校を訪問するまえに、教頭とは打ち合わせをしたが、6年生の学級担任と活動内容について話し合わなかったため、うまく連携ができなかったと思われる。

8. おわりに

本プロジェクトは、大学外のコミュニティと留学生をつなぐことを目指した。ここでは、大学外のコミュニティを小学校及び小学生と考えた。「6. 考察」より、小学生と留学生を「つなぐ」ことができたとはいえないかもしれないが、つながる契機を提供できたとはいえよう。

留学生は小学校での母国紹介に高い達成感を感じていた。「伝えたいことを伝えることができた／伝わったことを実感できた」と感じており、彼らの伝える母国は小学生に理解され、受け入れられたと考えられる。

だが一方で、留学生は自分の伝えたいことを伝えることができたが、小学生が留学生に自身のことを語る時間はほとんどなかった。発表以外にも掃除や昼休みの時間を小学生と共にし、学校見学を体験することで、留学生は日本の小学生についてある程度知る機会を得、そこに楽しさも感じていた。しかし、それは「つなぐ」ではなく「小学校を知る」にとどまるものであった可能性も否定できない。学級担任のコメントにもあったが、小学生も参加できるような双方向の活動を行うことで、お互いをより深く知り、「つなぐ」に結び付けることができたのではないかと考える。そのためにも、活動に関わる関係者同士が、活動目的や内容について共有しておくことの大切さを改めて感じた。今後の課題とするところである。

参考文献

- 鈴木敏恵(2012)『課題解決力と論理的思考力が身につく プロジェクト学習の基本と手法』教育出版
- 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際－学習支援システムの開発－』大修館書店
- 玉木佳代子(2009)「外国語学習におけるプロジェクト授業－その理論と実践」『立命館言語文化研究』
21 巻 2 号、pp.231-246、立命館大学国際言語文化研究所
- 細川英雄(2008)「教育環境空間の設計・設定をめざして 実践を拓き、研究を紡ぐ教師へ」細川英雄・ことばと文化の教育を考える会編著『ことばの教育を実践する・探求する 活動型日本語教育の広がり』pp.4-16、凡人社